

「熟議カケアイ」といふ試みについて

吉川 敦

平成 22 年 8 月 28 日

目次

1 はじめに	1
2 「熟議カケアイ」といふアイデアのむづかしさ	3
3 「硬直化」対策としての「熟議カケアイ」	4
4 本当の課題は何なのか	6
5 「国民」と「市民」,そして「健全なる素人」について	10
6 文明としての問題	13
7 をはりに 「熟議カケアイ」へのコメントは全くの無駄なのか	15

1 はじめに

平成 22 年 4 月,文部科学省は鈴木寛副大臣の提唱で「熟議カケアイ」と銘打った「政策創造エンジン」をウェブ上に開いた。わたくしがその存在を知ったのは,日本経済新聞の記事からであり,開設当初からフォローしてみたわけではない¹。しかし,鈴木副大臣の趣意書²を拝見し,また,現行の日本の教育が万全の状況にあるとは言ひがたいことは,わたくしも同感すること

¹このやうな記事を歴史的仮名遣で書かうといふのは党派性の宣言と受け取られる可能性が高いが,実際は「遊び」の,いや「ゆとり」のといふべきか,さういふ精神に基づくものである。

²エリア「未来の学校」の冒頭で

グローバル化や少子高齢化、IT化・価値観の多様化等、社会が急速に変化している中、2020年の学校はどうあるべきでしょうか。何を、どのように、子どもたちに教えていくのがよいかということについて、様々な観点から考えていかなければならないと思います。漠然としている間ですが、これこそ、教育に携わる当事者みんなで考えていくべきものだと思います。この掲示板では、「未来の学校」と題して、参加者の皆さんから、2020年の学校の姿はどうなるのか、どうあるべきかについて、アイデアをいただけたら幸いです。

と副大臣は言ふ。

であるから、今から 10 年後を目処に実施に移すべき改善策を論ずるのなら、早すぎるといふこともないであらうし、趣旨はよくわかったといふつもりになつた。

もとより、文部科学省は教育行政の専門官庁であり、教育政策研究所を備へ、また、各種の審議会や学会会議、学術振興会などを通じて、教育の現状の把握に努めてゐるはずである。さういふ調査研究や分析報告の類も研究会議事録から各種中間報告、年次報告などの形で公刊されてゐる。かういふ背景のもとで、敢へて「熟議カケアイ」といふ「政策創造エンジン」が提起されたことには理由があるはずである。それは、上述の背景事情を考慮してみると、要するに、上述の方式での調査分析に基いての政策提言では発想の幅の広がり十分ではなく、固定化や形骸化の惧れが皆無とは言へないのではないか、といふ危惧が感じられてゐるからこそその提起であつたに違ひない。

かう考へると、健全なる素人³といふ立場からの参加が恣憑されてゐることになる⁴。さういふことであれば、さうして、今から十年後を考へるといふ設定であれば、わたくしにも意見がある。コメントを送つてやらうぢやないか、といふことで、6 月くらゐからであつたか「熟議カケアイ」に参加をした。

わたくしからの主要な提案は、

現行の四月開始三月終了の日本の学校年度を、北半球標準に随ひ、
主に七月八月の夏季の長期休暇が学校年度の境目に来るやうな九
月授業開始六月授業終了のもの⁵に変更すべきだ

といふことである。わたくしの長い間の持論ではあるが、文部科学省の当局者の目に触れるかも知れないやうな宣伝機会は滅多にないといふ判断もあつた。

この提案については「熟議カケアイ」参加者の若干から好意的な反応があつた⁶。だが、一コメント 600 字以内といふ制限は提案を展開するためにはいかにも短く、やや詳しく述べた稿を別に用意して、このホームページに貼り付けた⁷。さういふわけで、表向きは匿名性が前提の「熟議カケアイ」サイトで、発信者を明示することになつた。もともと責任ある発言を心掛けてみたが、立場上、現在の勤務先に不利にならないやうな配慮はしたつもりである。

だが、現実に「未来の学校」といふエリアでの論議は混乱してゐるといふのが正しい評価だらう。それはどうしてなのか。「熟議カケアイ」の設計そのものに内在する問題もあるのだが、実は、文明的とも言ひ得るはるかに深い理由がありさうである。

³この語については改めて後述する (§5)。

⁴つまり、文部科学省に限らず、現行の官庁の政策作成方式に対する批判が文部科学副大臣があると考へるべきかも知れない。現行の体制についてのわたくしの感想は後述する。

⁵学校年度を九月開始、八月終了とするか、七月開始六月終了とするかといふ選択はある。

⁶比較的若いと思はれる方二名からは非好意的意見が届いた。

⁷「学校年度設定の変更(提案)」。他にも「入学試験学」などを示してゐる。いづれもファイルが URL <http://www7b.biglobe.ne.jp/yoshikawa/page3.html> に貼つてある。

2 「熟議カケアイ」といふアイデアのむづかしさ

さて、「熟議カケアイ」とは、わたくしの理解では、硬直化した印象も否めない現行の官庁や官庁周辺の政策発掘機能を、「健全なる素人」を議論に巻き込むことによつて補はうといふものである。しかし、かういふ試みを支へるべき「健全なる素人」の条件が結構むづかしい。あることについて専門外ではあるが意見を持つ人はかなり多いであらう。ただ、関はつてゐる場合でも、関はり方はさまざまなはずである。

特に、教育となると、大概の人が、みづからのこととして、あるいは保護者として、経験してゐる。したがつて、それなりの意見はあるわけである。その一方で、教育に専門的に関はつてゐる人は、決して多いとは言へない。つまり、例へば、教育といふとき、それぞれが脳裏に描く像はばらばらであると言ふべきであつて、その上、同じやうな方向を向いてゐるやうであつても、精粗にも差があるはずなのである。また、比較的似たやうな描像が多いやうだからと言つて、何らかの誘導の効果があつたといふこともあり得るから、そのやうなものの適切度が高いとも言ひ切れまい。

一応、このやうな想定と理解のもとで、次に掲げる「熟議カケアイ宣言」を見てみよう：

子どもたちは、どう育ち、育てられ、未来の日本をつくっていくのでしょうか。

今、この国の教育は大きな困難と不確実な岐路に立っています。複雑で多様な問題をどのように解決し、どんな将来像を描いていくのか。

文科省の教育政策にとっていちばん必要なもの。原点にあるもの。それは、ビビッドでリアルな現場の声にあると考えました。

教育者、保護者、市民、識者、教員をめざす若者たちの声やつぶやきが集まり、自由に議論される場をつくる。議論が議論を呼び、「熟議」されていき、政策形成が確かになっていく。そして、その政策が次の入り口になっていく。

この市民主役のプロセスこそ、今、求められており、実行しなければいけないものだと考えました。

熟議カケアイ。参加してください。

子どもたちの教育が変われば、日本の未来が変わります。

提案者がかう問ひ掛けてゐるのだから、それを受け留めて参加しようと思へるのは「市民」にとつて極めて自然なことであらう。だが、その前に、一体この問ひ掛けが態を成してゐるのかどうか、そのことを検討するのが、「健全なる素人」として執るべき態度ではないだらうか。

さう思つてみると、この「熟議カケアイ宣言」の最後の一行

子どもたちの教育が変われば、日本の未来が変わります。

に不誠実さと言つてもよい重大な欠陥が凝縮されてゐることが見えてしまふ。

わたくしがかう言ふとキョトンとする人は決して少なくはないだらう。だが、それでは困るのである。実際、この宣言に従ふ限り、「熟議カケアイ」には極めて危険な因子が含まれてをり、さういふ点を明確に感じとることが出来て初めて危険な因子の展開が避けられ、なほ、有効な、つまり、「健全なる素人」の活躍の場になりうるのである。

もう一度、何の思ひ入れもなく、先ほど引用した最後の一行を読んでいただきたい。発信内容は何だらうか。そこで、改めて、何の思ひ入れもなく、「熟議カケアイ宣言」を読んでいただきたい。発信内容が的確に伝はつたらうか。さうして、わたくしが何を問題にしたのかおわかりいただけたらうか⁸。

さう、発信内容は空なのである。さうして、あたかも何かを発信してゐるかのやうな気分だけは濃厚に醸し出さうとしてゐる。だから、宣言を読み、各エリアの趣意書を見て、各自の思ひ入れや思ひ込みを被せ、それぞれ勝手な読み方をしてしまふ、さういふ仕組にこの「熟議カケアイ」はなつてゐるわけである⁹。

3 「硬直化」対策としての「熟議カケアイ」

「熟議カケアイ宣言」の文言や、また、熟議エリア「未来の学校」の評価は一旦置いて、文部科学省が敢へて「政策創造エンジン」といふものをウェブ上に開いた理由を想像してみよう¹⁰。これには §1 で触れたやうに、従来からの政策決定の課程に対する批判があつたであらう。だが、さういふ政策提起に関はる方式や人員の質の硬直化に対する批判を、「熟議カケアイ」式の形に展開して

この市民役のプロセスこそ、今、求められており、実行しなければいけないものだと考えました。

と言ひ切つてしまふことは、飛躍があり、その可否の検討が要るであらう。つまり、この断言は、ある価値観に基づいてゐるのだが、それを承認するのは当然であり、価値観の当否を論ずる必要はないといふ暗黙の前提があるやうなのである。それは本当は不適当なことではないかと、わたくしは思ふ。

政策提起に関はる方式が硬直化してゐることは、わたくしも認める。わたくしだけでなく、相当数の国民¹¹が久しい前から認めてゐるであらう。さ

⁸熟議カケアイ宣言」の日本語としての質の評価には目をつぶつての上である。

⁹個々の重要な語句の内容は、誤解が生じないように、的確かつ明晰に定められてゐるであらうか。それぞれが勝手な解釈をしてゐながらも語形だけが共通といふ用語での議論からは一体どんな結論が得られるのだらうか。もし、当局者が本気で

議論が議論を呼び、「熟議」されていき、政策形成が確かになっていく。

と考へてゐるとしたら、無責任といふものである。むしろ、恣意的な政策提案の際の権威付けに「熟議カケアイ」利用が具合がいいと当局者が考へても不思議ではないとわたくしは思つてゐる。

¹⁰もちろん、脚注 9 で言及したやうな意図的な不誠実さはないと考へる。

¹¹「市民」ではないことに注意してほしい。「国民」と「市民」の違いをわたくしがどう理解してゐるかは後に述べる。

ればこそ、昨夏の総選挙の結果があつたのであり、「政治主導」といふ言葉の響きの良さにも酔つたのではなかつたか。しかし、その後実際に起きたことから、響きの良さだけでは、国民は、もはや、敢へてかう言ふのだが、欺されなくなつてしまつたのである。これは全体としてはいいことなのだが、政治家や官僚は必ずしも十分に学習してゐないなと思はせたのが、まさに、「熟議カケアイ宣言」の文言であつた。

さて、政策決定の方式が硬直化してゐると言つた。硬直化が好ましくないといふ含意があるわけであり、ここまでの論法では、当然、その当否を検討するために、硬直化はなぜ不都合なのか、さう問はなければならない。しかし、「硬直化」といふ語彙を使つた途端に問はれたほうが思考停止を起こしてしまふかも知れない。つまり、日本の言語習慣のむづかしいところであるが、一語一語が何らかの価値を担つてゐる。したがつて、何らかの問ひ掛けをする場合は、用ゐるべき言葉に、その問ひ掛けの場合にのみ通用する限定、つまり、定義を与へておくことが不可欠なのである。これは日本語の場合に限つたことではないが、特に、日本語の場合、価値中立的な議論の遂行のためには絶対に欠かせない手続きのはず¹²である。

そこで、改めて「硬直化」とは何かといふことを、できるだけ価値判断を内包しない形で、述べなければならない。「硬直化」の意味を考察しよう。硬直化とは、ある現象の解釈や処理の過程において、考慮対象の範囲が限定されるといふ形に観察される。かういふことであれば、別な表現なら、効率化と言つてもよいであらう。無駄がないとも言へるであらう。だが、肝腎の現象が種々変動をしてゐるにもかかはらず、ある特定の相を示してゐるときに判断を与へるための必要範囲だけに注意の対象を限つてゐては、不足であることは明らかである。つまり、対象となる現象の変動の可能性まで想定に入れてゐる際は、硬直化といふ語は適切ではないだらう。しかし、さうは言つても入れ子型の階層性のあるのがものごとの常であり、硬直化と見るか効率化と見るかは、ほんのわづかの視点の移動の結果に過ぎない¹³。

ところで、「熟議カケアイ」の発想の背後に文部科学行政の政策決定過程の「硬直化」対策が潜んでゐるかどうかが検討してみよう。もちろん、関係者が明示的に対策が潜んでゐるかみないかを表明してあれば、事柄は簡単になりさうであるが、実際は、その場合でも、当事者の意識の深淺は論じられるのであり、今の場合は、精々示唆以上のものはないのだから、結果を観察して判断を加へるのが正しい。

さうして、結論から言へば、「硬直化」対策といふ要素は潜んでゐるやうである。しかし、「熟議カケアイ宣言」を分析してみると、「硬直化」対策として

¹²この手続きを回避するのが、場特有の特殊な用語や用法である。この習慣は、日本人の歴史的な言語習慣を踏まへた知恵、つまり、合理的な対応であつたとも考へられる。しかし、「わかりやすい表現」などの要請のもとで、報道では言い換へがなされたりしてゐるうちに、明晰で厳格であるべき行政用語の言い換えにまで及んでゐるのが、日本の現状ではある。

¹³まさに、藤井直敬氏：「ソーシャル・ブレインズ入門」（講談社現代新書、平成 22 年）で詳述されてゐる「認知コスト」の問題に近い。「認知コスト」が場を支配してゐるときに硬直化が認められると言ふことができるだらう。

の意識は基本において不十分であつた。その理由は二点あるとわたくしは考へる。第一に、本件の提案者諸氏に「硬直化」の認識はあつたことは確かで、「熟議カケアイ」が対策として構想されたと理解することは妥当であらうが、その際、「硬直化」してゐるのは提案者諸氏が意識してゐる範囲だけだと思ひ込んでゐた節がある。そのことが「熟議カケアイ宣言」の一節

文科省の教育政策にとっていちばん必要なもの。原点にあるもの。それは、ビビッドでリアルな現場の声にあると考えました。

に伺へる！「ビビッドでリアルな現場の声」といふ、文字通り、響きだけの語彙が現はれたゆゑんであらう。何となく言ひたいことがわかるといふのでは駄目なのである。そこで、この一連の文章が浮かび上がらさうとしてゐるものをよくよく想像してみよう。文部科学省の周辺の間人だけでは教育政策が建てられないから現場の人たちの意見を徴したいといふ風に読めさうだが、それは正しい読み方だらうか。権限と責任を持つてゐるはずの間人が手の内を明かさずに物を言つてゐるといふことを考へてみるべきであらう。さらに、「ビビッドでリアル」がここで用ゐられるべき適切な表現かどうかは問はないとしても「現場」といふ語があれば、「健全なる素人」の参入障壁となり、極端な場合、「不健全なる業界人¹⁴」とでもいふ人たちの集ふ場になつてしまつても不思議ではないだらう。

「硬直化」対策としての不十分さの第二の理由であるが、肝腎の提案者諸氏にも「硬直化」が見られるかも知れないといふことを失念してゐたと見られることである。失念してゐたこと自体「硬直化」の現れに他ならないが、折角の「熟議カケアイ」の趣旨そのものの混乱の原因、つまり、「熟議カケアイ宣言」の冒頭の二節

子どもたちは、どう育ち、育てられ、未来の日本をつくっていくのでしょうか。

今、この国の教育は大きな困難と不確実な岐路に立っています。複雑で多様な問題をどのように解決し、どんな将来像を描いていくのか。

といふ空虚な文言、むしろ、発信者の立場を考へれば、無責任の極みとしか言へない文章を産み出してしまつたのであらう。

もとより、わたくしは提案者諸氏の誠実さを信じるので、「硬直化」を解きほぐさへすれば、かれらが直感的に捉へてゐるに違ひない種々の問題の真相が明らかになるだらうと考へてゐる。

4 本当の課題は何なのか

前節末尾で引用した「熟議カケアイ宣言」のどこに発信者側の硬直性が垣間見えるのか一応説明をしよう。熟議エリア「未来の学校」の趣意書は

¹⁴ 「不健全なる業界人」の分析は本稿では行はない。

グローバル化や少子高齢化、IT化・価値観の多様化等、社会が急速に変化している中、2020年の学校はどうあるべきでしょうか。

で始まる¹⁵。2020年、つまり、十年後の日本の教育事情の設計が問ひ掛けられてをり、してみると、「熟議カケアイ宣言」で謂ふ「未来」も十年後を指すのであらう。十年は短いやうで長い。今から十年前を思ひ起こして見ると、世の中は随分変はつた。二十年前と今とを比べて見ると、とても同じ国のこととは思はれないくらいの変化がある。もちろん、不変の部分もあるが、この間の変化を見て、わたくしたちに悔やむ点があるのは、変化に対して適切な対応が執られて来なかつたから、全体としては悪い方向への変化が加速してゐるといふ印象があることであらう¹⁶。これからの十年に予想される変化は一層の困難の到来であつてもをかしくはないのであり、少なくとも従来試みて効果が得られなかつたやうな対策の延長上のものに多大の期待をすることはできないであらう。確かに、「政策創造エンジン」や「熟議カケアイ」には時宜に適つた意欲的な試みといふ評価はできるのである。しかし、かう考へてみると、

子どもたちの教育が変われば、日本の未来が変わります。

とは、余りに能天気ではないだらうか。「子どもたちの教育」が「日本の未来」を変へるであらうことは一般論として間違ひではない。だが、文脈を思ひ出してほしい。十年後の教育を問題にしてゐるのである。今日の子どもたちでさへ、かれらが「日本の未来」を変へるやうな活躍をするのは概ね今から十年から十五年以上先だと考へるべきだとすれば、「熟議カケアイ宣言」の言ふ十年後の子どもたちが関はる「日本の未来」とは、ほぼ半世紀後のことにならう。

「日本の未来」といふとき直近の十年間はどうするのか、まづ、それを明らかにしなければ安心して次のことは考へられないではないか。遠い将来のことを考へることが無意味だと言つてゐるのではない。しかし、政治家や行政の当事者は、この期間のことにこそ重い責任がある。もし、そのことを忘れてゐるといふのなら、それは「硬直化」では済まないことになつてしまふ。また、もし、十年後の教育のあり方を理想型として描きながら、直近の十年を移行期として上手に運営して行かう、そのための知恵を「ビビッドでリアルな現場の声」から得ようといふのなら、「現場の声」が戸惑はないやうに、もつと的確な表現で「熟議カケアイ」を呼びかけるべきであつた。

かう考へてくると、既に§2で示唆しておいたが、上に引用した文に含まれる深刻な欠陥といふものが明らかになるだらう。つまり、本来は、

¹⁵脚注2で、熟議エリア「未来の学校」の趣意書を引用した。

¹⁶善悪や価値の判断はむづかしい。ここで「悪い」といふのは「生活水準の低下」「収入の減少」「失職」といつた経済環境の悪化と捉へていただきたい。しかし、それが意欲の低下や、引いては、日本社会の士気の低下を招き、をぞましき事件の続発に繋がつてもゐるのだらう。

「日本の未来」がかうなるやうに「子どもたちの教育」を変へるべき必要があるとすれば、そのやうに変へたい

といふ政策意思の表明でなければならず、実は、真つ先に問はれるべきことがあるとすれば、それは「日本の未来」でなければならなかつた。そして「日本の未来」を論ずる気がないのであれば、提案者側は、その「日本の未来」についての理解と想定を示しておいた上で、広く議論を懇懇するといふのが、本来採られるべき手順であつた。

わたくしが「熟議カケアイ」には危険な因子が含まれてゐるといふのは、まさに、この論理的な逆転構造である。本来目指すべき姿は暗箱化されてみて熟議の参加者には見えないやうになつてゐる。「熟議カケアイ」の形で、見えてはみない目的に至るべき道筋を探るといふことは、当てる明らかなではないことを要請してゐることであり、何が出てくるかわからないわけである。それでも提案者たちがもともと想定してみた案が出てくるか、あるいは、出てこないなら、さういふものを忍ばせることができるであらう。さうして、「熟議カケアイ」で得られた提案をもとにして政策創造をしたと言へば、それなりの正統性があるかのやうに捉へられるであらう。わたくしが、柄にもなく、この記事を書かうと思ひ立つたのは、この危険性の芽を摘むきっかけを作りたいからである。

現下の「熟議カケアイ」がこのやうな危険性を帯びてゐるかどうかは不明である。だが、さうでないとしたら、政治家を含む関係者が余りにもナイーブ過ぎることになり、それはそれで、また、別の危険性を包含してゐることを意味する。いづれにせよ、判断のためには「熟議カケアイ宣言」から発信者側が「日本の未来」をどう想定してゐるかを讀みとらなければならない。

そこで、改めて「熟議カケアイ宣言」を眺めてほしい。冒頭に「日本の未来」といふ句があり、末尾に「未来の日本」といふ句が現はれる。しかし、その内容に対する示唆は全くない。一方、下位の熟議エリア「未来の学校」は、趣意書といふべき鈴木副大臣のコメントから始まり、その冒頭では

グローバル化や少子高齢化、IT化・価値観の多様化等、社会が急速に変化している

と述べられる。この内容は厳格には現在のことであるが、少なくともこのエリアでは、この延長上に「未来の日本」を見るのが期待されてゐることが推測される。しかし、ここで「熟議カケアイ宣言」の末尾、繰り返し引用するが、

子どもたちの教育が変われば、日本の未来が変わります。

を思ひ起こすと、「熟議カケアイ」の提唱者たちには、現状から外挿される未来は好ましいことではないといふ気分が潜んでゐるのではないだらうか。さうだとしても、「子どもたちの教育」と「日本の未来」との関係がわからないのである。

結局、「熟議カケアイ」の提唱者たち、つまり、文部科学省の周辺に集ふ政治家や行政官たちは、現在の日本は好ましい状態であるとは思ってはゐないが、未来の日本についても明白な描像を持つてはゐないか持つてはゐても公開する意志はないようだといふ判断に到達する。わたくしは後者が実情に近いだらうと想像するが、それは今まで可能性を論じてきたやうな一種の悪意に拠るものではなくて、言はば、文部科学省の権限外のことだから敢へて触れまいとしたからであらう。ここには§1の末尾で述べた「文明的とも言へる深い理由」の一端が覗いてゐると思ふ。ただし、これについては別に対策といふかわたくしから提案したいことがあり、後ほど述べる。

一応、ここまでで本来論ずべきこと、つまり、本当の課題は何であつたかについてのわたくしの見解を整理しておかう。それは、言ふまでもなく日本の望ましい未来の姿を提案することである。このためにはそれなりの議論を要するのだが、それを伏せて「熟議カケアイ」は提起したのは誠実かどうかは問はないにせよ適切ではなかつた。やはり、どうしても日本の望ましい未来の姿を論じることから始めなければならない。

日本の未来を論ずるとき、少なくとも「子どもたちの教育」との絡みを尊重するとき、忘れてはいけないことがある。実は、すでにさうなのだが、日本が世界の中の一国であるといふことの意味を深刻に反映させなければならないのである。

すなはち、本当の課題は、十年後と言はず、今後の世界で日本がどういふ位置を占めるべきか、さういふことの確認をすることである。当然、そのためには世界がどう変化して行くかの見通しを持たなければならない。それも、傍観者としてではなく、一緒に新たな世界を作つて行くといふ積極的な関与の意志と併せて、今後の世界を見通さなければならない。つまり、従来、日本で強かつた日本と世界とは別物といふ発想を払拭し、世界への寄与が日本への寄与であり、日本への貢献が世界への貢献であるやうな、さういふ文脈に従はなければならない。日本の未来を描くといふことは、同時に日本から見た世界像が十二分に合理的なものとして描けることも包含するのである¹⁷。そのやうな世界の一員として、これからの日本人は、つまり、今（や今より後）の日本の子どもたちであるが、どのような資質を備へてゐなければならないのか、それを次に問ふのが正しい¹⁸。

¹⁷世界といふやうなものが具体的な形で存在するわけではなく、日本や種々の国や地域の相互運動の全体が世界と呼ばれるべきものである。したがつて、意識の有無にかかはらず、日本人の日々の活動は日本を形作ると同時に日本が一部であるやうな世界の全体に何らかの影響を及ぼしてゐる。日本と世界を別物だと捉へることは、そのやうなことがあるとは夢想だにせずといふことである。

¹⁸さうして、具体的な細部を設計する話は、さらに、その後である。もとより、細かい現象を観察し収集しておくことは不可欠なことだが、対策が、それらに対する対症療法的なものに留まるやうでは精々関係者の一時の満足しか得られない。

5 「国民」と「市民」、そして「健全なる素人」について

§4の末尾に挙げた本当の課題が意味を持つものかどうかを見るために、日本の教育が世界の一員として貢献できる人間を産み出していくための条件を一応検討しておかう。教育の効果として知識技能の水準が高ければ、具体的な形で貢献度は上るであらう。だが、日本の教育が世界といふ文脈で価値を持つ条件は、決して知識技能の意味での教育水準の高さではない。実際、それだけであれば、日本の教育以外でも十分に代替が効くのである。では、日本の教育が世界といふ文脈で価値を持つとしたら、それはどこから来るのか。地域性と歴史性の二点に尽きるのである。このことは他国の教育の場合でも、同じことであつて、地域性や歴史性を排除して成り立つのは目標が明確に限定されてある場合の技術教育だけである。

日本の未来を論じようといふとき、それは、すなはち世界の未来、翻つて、世界を構成する国や地域の未来を論じようといふことにもなる。緻密な議論を期待しようもないことであるが、その意味は気候変動や科学技術や環境の悪化あるいは人口増について概略的な見当付けをすることが辛うじて可能だといふことではない。未来の日本、したがつて未来の世界はこれから工作して行くことができるのである。したがつて、与へられた条件を活かしつつ多少の努力で実現できさうな理想像を描いておくことが重要であり、しかも、その理想像は国や地域によつてそれぞれに違ひ得ることを承知しておくことが大切である。当然のことながら、理想像同士が衝突することもあるだらう。そのときに、それぞれがどう対応するだらうかの予想についても予め考慮に入れておくことがよい。

かう見ると、確かに、上に挙げた課題はまづ解決を試みるべきことであるが、事柄の性質上、相当の見識が必要とされることもわかる。判断の根幹が狂はないためには、「健全なる素人」でなければならないが、しかし、提案が合理的であるためには、良質な経験と正確な知識が不可欠な「専門職業人」でもなければならない。さうして、日本の未来を論じ、併せて世界の未来を論じるのだから、地域性と歴史性についての深い理解がなければならない。さらに、理想像の衝突の回避あるいは解決を画策しておくだけの覚悟といふか気概を身に着けてゐなければならない。このやうな仕事を果たすことは、「熟議カケアイ宣言」における

教育者、保護者、市民、識者、教員をめざす若者たち

と一般に括られる人たち¹⁹には荷はいかにも重く、もちろん、対応する

ビビッドでリアルな現場

¹⁹思ひつきで羅列されたやうな種別の人たちであるが、構造的には、教育者と保護者を対峙させ、市民と識者を対比させてあるやうである。さうすると、教員をめざす若者たちに対しては、将来の保護者たちが暗黙裡に想定されてゐるのだらうか。

は、存在しない。わたくしの理解では、ここは「熟議カケアイ宣言」を引き合ひに出すのは筋違ひであつて、そもそも現在の日本には、上に挙げた課題と取り組んだり、取り組まうとする習慣を持つた人間の層が著しく薄くなつてゐるのである。文明的な現象とも言ふべきものである²⁰。

この「熟議カケアイ」は日本の未来の提案を欠いたまま、日本の教育の未来を問ひかけてゐる。それゆゑに「熟議カケアイ宣言」は空虚な文章なのだから、したがつて「熟議カケアイ」そのものが意味を失つてはゐる。しかし、論理的な試みとして、仮に、日本の未来の姿について実は何らかの提案があつたとして上での「熟議カケアイ」の憑憑であれば、それはそれで十分に成立するかどうか考へてみよう。これは、「日本の未来」について人それぞれが勝手なものを想像せよといふのとは違ふ。「日本の未来」の想定条件は、少なくとも、§4 末尾の

日本の未来を描くといふことは、同時に日本から見た世界像が十二分に合理的なものとして描けることも包含するのである

といふ条件は満たされてゐるとして考へたい。このとき、すでに述べたやうに、

そのやうな世界の一員として、これからの日本人は、つまり、今の日本の子どもたちであるが、どのような資質を備へてゐなければならないのか

といふ問ひ掛けが、まさに「熟議カケアイ」の役割のはずであつた。大事なことは、これは決して抽象的な問ひではないことをきちんと認識することである。したがつて、意義ある応答においては地域性と歴史性とももつとも重要な、本質的と言つてもよい要素になる。それでは「熟議カケアイ」に誘はれてゐるのはどういふ人たちだらうか。今まで繰り返し引用してきた語句からもつとも広義のものを選び出すと「市民」になり、現在や将来を問はず「ビビッドでリアルな現場」と言はれる、実は、教育現場に近い人たちのやうである。さうして、「市民」には

この市民主役のプロセスこそ、今、求められており、実行しなければいけないものだ

といふ風に主役を張ることが期待されてゐる。

だが、「市民」とは何者であらうか。「識者」と対峙する者であれば「素人」である。さうか、「市民」とは、すなはち、わたくしが繰り返し強調してきた「健全なる素人」のことだらうか。

確かに、わたくしは「健全なる素人」といふ言葉を使ひながら、実は、専門家ではないが専門知識の根底の意義について直感的な感覚が備はつてゐて、専門家が陥りがちな視野の狭さに囚はれずに本質を貫徹した判断ができる人といふやうな意味を含ませてゐるといふことを、明確には説明して来なかつた。だが、このやうな人が完全な形で存在するはずはないことは明らかだ

²⁰§1 末尾参照。

う。「健全なる素人」は人間のありかたに規範性を与へるものである。理想形としての「健全なる素人」とは、少なくとも一分野では卓越した専門家であり、それ以外の分野では、卓越性を獲得した分野での訓練や経験を通じて得た洞察力に基づく直感的な判断力が発揮できるやうな人物を指したいと考へてゐる。しかし、一分野での卓越性は瞬時に獲得できるものではない。さうして、他分野でも有効な洞察力はさういふ意欲をもともと仕込まれてゐないと育つて行かないであらう。つまり「健全なる素人」は「歴史性」との親和性が高い存在なのである。

それでは「市民」はどうだらうか。「都市住民」とどう違ふのだらうか。東京にある「市民」とニューヨークの「市民」、あるいは北京や平壤の「市民」は確かに違ふだらう。さういふ意味で「市民」には地域性はあるやうである。ただし、この場合の地域性は個々の都市に限定された局所性と考へるべきであらう。「熟議カケアイ」に加はるやうな「市民」はどんな「市民」なのだらうか。それは明らかであらうか。しかも「識者」と対照されてゐるのである。「市民」は「市民革命」「市民運動」「市民生活」などの造語にも現はれる。最初にあげた造語は抽象的な概念だが、他のものも必ずしも実態がはつきりしてはゐない。一般の日本語の感覚では、市井の一般人、つまり、普通のおぢさん、おばさんを指すと考へるべきではなからうか。したがつて、「市民」の特徴は、日常性であり、また、地域性も希薄なやうである。すなはち、言ひ換えれば、「市民」は歴史性や地域性とはむしろ独立な概念と考へるべきなのである²¹。他方、「国民」といふ言葉がある。「国民」といふ概念の特徴は、地域性であり、国といふ一都市を越えた文化的な背景のある行政的な統一性を前提としてゐる。つまり、「国民」といふときは、必然的に地域性と歴史性を併せて内包してしまふ。そして、「健全なる素人」は「国民」の中にしか理想的に存在しない。

「市民」と「国民」とは共通の水準の人間集団を指す概念ではない。恐らく、「市民」として整理したときには、歴史性を欠き、地域性も希薄であるやうな、もつとも広範な人間集団を指す理念と解するべきではないか。さらに、踏み込んだ性格を考慮すると、支配してゐる「時間」が現在であり、「空間」が当地であるやうな人間の集団に対する理念でもある。「国民」は歴史性と地域性に強く規定された人間集団を指してをり、両者は全く異なる文脈に属してゐるわけである。

そこで、「日本の未来」の含意が了解されてゐるといふ想定のもとで、「熟議カケアイ宣言」に戻らう。ここには「国民」といふ語は存在せず、代りに「市民」といふ言葉が繰り返し現はれる。それどころか、「市民」こそが「主役」

²¹「市民」は citizen や citoyen などの欧語からの借用語であるが、原語と同じ背景や文脈で用ゐられてゐると考へるべきではない。日本語での「市民」は「歴史性」や「地域性」が希薄なゆゑに近年一種の理想主義の象徴として多用され、使用する際には国際主義への想念も籠つてゐるであらう。地域性の希薄さを、局所性ではなく、普遍性と了解する立場である。しかし、原語の場合は、その言葉が熟してきた過程があり、歴史性と地域性がしつかりと内包されてゐる。言ひ換えれば「市民」を詳細な注釈なしに原語に訳しなほすことはできないわけである。

でなければならないと言ふ。だが、かうして細かく言葉の意味を分析して来ると、「日本の未来」はどんな形にせよ地域性と歴史性を欠いては意味を持たず、他方、「市民」には歴史性や地域性の要素が介在し得る余地はほとんどなく、つまり、この組合せは論理的には全く意味を持ち得ないものなのである。要するに、「熟議カケアイ宣言」は響きだけあつて中身は全く空なのである。

6 文明としての問題

§5の末尾は、「熟議カケアイ」そのものの意義を疑はせるものであつた。しかし、「熟議カケアイ宣言」のやうな空虚な文章がウェブ上に出現してしまつた背景には、「日本の未来」の内容についての提示を欠いても問ひ掛けが成り立つといふ当局者の思ひ込みがあつたからである。論理構成の面での勘違ひもあつただらう。極めて優秀なはずの当局者たちが、なぜ、このやうな不備を犯してしまつたのか。

「日本の未来」の内容についての提示がなかつた理由はいくつか考へられる。例へば、第一に、当局者には、そもそも「未来」の内容を想像しようといふ発想がなかつた、第二に、「未来」の内容については概略的な想定はあるのだが、特別な理由もないまま、この件では提示の必要はないと判断した、第三に、文部科学省の当局者としては「未来」の内容についての概略的な想定はあるのだが、他省庁との協議を経てみないから提示すべきではないと判断した、第四に、「未来」の内容については概略的な想定はあるのだが、この件での論議の方向性を限定してしまふだらうから提示すべきではないと判断した、第五に、「未来」の内容については概略的な想定はあるのだが、「熟議カケアイ」参加者から似たやうなものの提起が前提の議論があるかも知れず、その際は、それに載る形で自分たちのもともとの想定を押し出したいから、この段階では提示を見送つた、などが挙げられよう。

実際のところは、第一、第二、第三の理由として挙げたあたりが真相に近かつたのではないかと想像してゐる。もしさうだとすると、一見違ふやうだが、共通の遠因が指摘できるだらう。それは、予め思考の枠を絞つて設定してゐるといふことである。割拠主義の弊かも知れない。何らかの課題に対して最初に行ふべきことは、その課題が属する文脈の全体像を探ることであらう。少なくとも、どこかの段階で全体像を探つておかなければならない。これは組織上のことではあるが、各個人にかういふ習慣があることが先行する。さう考へると、上述の「健全なる素人」の要件と符合してゐることがわかるだらう。つまり、「日本の未来」の提示がなかつた遠因は、「健全なる素人」性を発揮する当局者が決して多くはなかつたといふことになる。

しかし、上掲の第一、第三の理由に「絞つて考へれば」、一応の対策が見えるやうな指摘に纏められよう。すなはち、個別省庁の管轄を横断するやうな民間の総合政策研究所、いはゆるシンクタンク、を強化せよといふことに

なる。民間とは言へ、本来は、大学を意味すべきだらう。政党でもよいだらう。しかし、行政組織に近くてはいけないと考へる。行政組織では、本質的に、現下の課題から抜け出すことは許されまい。民間の総合研究所もそれぞれに営業活動があるであらう。長期課題、例へば、半世紀スパンの課題は、大学に専門研究所を置いて研究遂行をするのがもつとも有効ではないかとわたくしは考へる。

より本質的な対策は、「健全なる素人」といふ価値を評価する習慣を打ち立てることである。かういふ人間の想定が西欧型民主主義の成立基盤になつてゐるとわたくしは思つてゐるが、日本の「裁判員制度」も前提の思想は「健全なる素人」性が誰にでも備はつてゐて、それが適切な過程を経ることによつて発露し、適切な判断を下すことができるはずであるといふ想定であらう。かう考へると、中等教育の目的は、「国民」に「健全なる素人」性の萌芽を確実なものとして仕込むことにあると言ふこともできるのではないだらうか。

「熟議カケアイ宣言」が空虚な文言になつてしまつたことには、技術的にも把握できる事情がある。当局者の言語感覚が極めて甘いのである。それについては、言葉の分析が本稿の主要な部分であるから殊更に説明は要らないであらう。しかし、これは当局者一人ひとりの問題ではなく、広くわれわれの問題でもある。

「国民」を成り立たせるのは「歴史性」と「地域性」であると上で述べた。「歴史性」と「地域性」は言語に凝縮する。日本の場合であれば、日本語である。日本語のむづかしさは語彙のひとつひとつが価値を伴つてゐることである。その価値は、個々の語彙の歴史性に密着し、社会の変動と共に、言語の一部が磨耗し、新たな発生を見る。さういふ言語現象に振り回されてゐるうちに、一語一語が深い意味を持つてゐるといふことを忘れてしまふ。そして、意味ではなく、好き嫌いと流行で言葉を選ぶやうになる。言語の本質である地域性と歴史性を忘れてしまふのである²²。

「熟議カケアイ」は「国」の将来の構造に関する話題を論じようといふにもかかはらず、地域性や歴史性とほぼ無縁の用語「市民」を前面に打ち出すといふ論理性を徹底的に欠いた宣言のもとに始められてしまつた。「熟議カケアイ」当局者や参加者の誠実さは疑ひやうはないが、誠実なだけでは、何とも説明の付かない儀式が執り行はれたことの説明にはならない。一体、これは何だつたのだらう。

²²したがつて、「他国語」の学習も中途半端になつてしまひ、果ては、語呂合はせによつて単語を記憶しようといふ信じがたい愚行が高校生の間で横行する。

7 をはりに 「熟議カケアイ」へのコメントは 全くの無駄なのか

「熟議カケアイ」は既述の通り丁寧に考へると実に変なものであつた。「市民」から寄せられたコメントである。「今」「此处」の話題が多数を占めたのは不思議ではない。特に、熟議エリア「未来の学校」は期間が長いためもあるが、「今」「此处」のコメントで一杯になつた。「過去」のコメントも混ざつたほどである。では、これらのコメント類は全くの無駄になつてしまふのであらうか²³。

「熟議カケアイ」は政治的な行為であつて論理的な行為ではない。つまり、どちらかと言へば、行政の課題といふよりも政治の課題が広く求められたと理解すべきだらう。さうだとすれば、これらのコメント類が無駄になるはずはない。だが、結局のところ、どういふ扱ひになるのかは、こんなわけで見当の付けやうもない。

(完)

²³ところが、「未来の学校」に限定して言へば、脚注2に明らかなやうに、副大臣の趣意書に論理的な不備はない。「当事者」へ呼びかけてをり、「市民」に問ひかけてはあない。

索引

- 「今」「此处」, 15
- 危険性, 8
- 危険な因子, 4, 8
- 教育現場, 11
- 教育者, 3, 10
- 教員, 3, 10
- 局所性, 12
- 空虚, 6, 11, 13, 14
- 国, 3, 6, 7, 9, 10, 12, 14
- 健全なる素人, 2-4, 6, 10-14
- 現場, 3, 6, 7, 10, 11
- 硬直化, 3-7
- 「硬直化」対策, 5, 6
- 効率化, 5
- 国際主義, 12
- 国民, 4, 12, 14
- 識者, 3, 10-12
- citizen, 12
- citoyen, 12
- 市民, 3, 4, 10-15
- 趣意書, 4, 6-8, 15
- 熟議カケアイ, 1-9, 11-15
- 熟議カケアイ宣言, 3-8, 10-14
- 鈴木寛副大臣, 1, 8
- 政策創造エンジン, 1, 2
- 世界の未来, 10
- 全体像, 13
- 専門職業人, 10
- 地域性, 10-14
- 日常性, 12
- 日本経済新聞, 1
- 日本の未来, 3, 7-13
- 認知コスト, 5
- 響き, 5, 6, 13
- 不健全なる業界人, 6
- 普遍性, 12
- 文脈, 7, 9, 10, 12, 13
- 文明的, 2, 9, 11
- 保護者, 3, 10
- 未来の学校, 1, 2, 4, 6-8, 15
- 未来の世界, 10
- 未来の日本, 3, 6, 8-10
- 歴史性, 10-14